

## 富岡鉄斎旧蔵明刊『釈氏源流』

河野 貴美子（文学学術院教授）

### はじめに

仏教は古来アジア全域に伝播し、とりわけ東アジアにおいては各地の思想や宗教、言語や文学、芸術などの学術文化のみならず、王権や国家のありようにもさまざまに深く関わり、浸透していった。今回新たに早稲田大学図書館に収蔵された『釈氏源流』は、明の宝成という僧が編纂したテキストで、上巻には釈迦の伝記故事を206話、下巻には中国に仏教が伝来し普及していく過程を語る故事202話を収めるもので、半葉ごとに1話を記し、全話において上図下文の形式で挿絵を伴う絵入り版本である。『釈氏源流』は、明の洪熙元年（1425）に刊行されて以後、中国および東アジアにおいて改編や覆刊が繰り返され、盛行したテキストであったが、日本に残る伝本は多くはなく、従来の仏伝研究においても日本所蔵の『釈氏源流』については十分な検討が及んでこなかった。しかし『釈氏源流』は、中国、朝鮮、日本からベトナム、タイに至るまで、実に広範囲に流伝し、また各地で「再生産」されたものであり、今回早稲田大学図書館に所蔵されることとなった伝本の「出現」は、東アジアに展開した仏教と、仏教に伴う文学や美術、そして出版文化の連関関係など、東アジア文化を多方面から複合的に考察するための、具体的情報を豊富にもたらしてくれるものである。しかも、この本は、明治・大正を通じて突出した存在感を放った文人であり、画家であり、そして蔵書家であった富岡鉄斎（1837～1924）の旧蔵本である。鉄斎の蒐書とその売立の経緯は、書物をめぐる文人、学者、蔵書家、さらには古書店のさまざまな動きを反映する、近代日本の書物文化史上の重要事項の一つといえる。そして、数万冊にも及ぶ富岡家の蔵書の中でも、この『釈氏源流』は「善本」とされ、他の選び抜かれた90部あまりの書物とともに『富岡文庫善本書影』（小林写真製版所出版部、1936年）に掲載されている。その貴重書が縁あって早稲田大学図書館に収蔵されることとなったわけである。

以下、当該の明刊『釈氏源流』の資料的意義を、版本に関わる書誌事項と、鉄斎旧蔵本であることに関わる情報の二方面から、紹介していきたい。

### 一、圓道重刊本『釈氏源流』

『釈氏源流』の文は、各種仏教経典や仏教関係書から仏伝故事に関わる記事を引用し、半葉のスペースに収まるように編集して綴られているが、伝本によって取りあげる故事には異同がある。南京で刊行された初版の洪熙元年刊本は、現在中国蘇州の西園寺に下巻の一部が残るのみで、その全

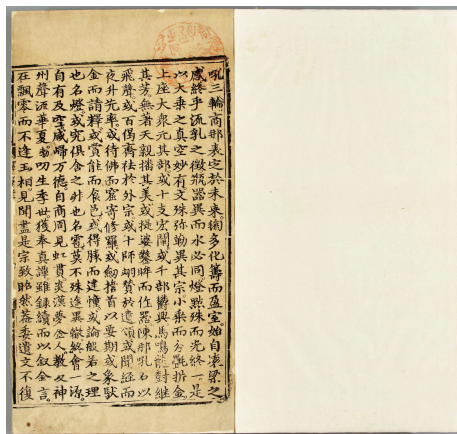
容は確認できないが、洪熙元年刊本を覆刻した嘉靖三十五年（1556）刊本には、上下巻ともに200話ずつ合計400話が収められていて、これが最初の形であったと思われる（中国書店蔵珍貴古籍叢刊（2012年）に影印あり）。しかし『釈氏源流』は、洪熙元年刊本が刊行されてまもなく、正統元年（1436）に再び南京で重刊本が刊行されている。正統元年刊本は現在、中国国家図書館と東京・芝の増上寺に伝わっており、上巻は206話、下巻は202話と、初版本から若干の増幅がみられる。さらにその後、場所を北京に移して、北京の大興隆寺の比丘圓道によって正統元年刊本の覆刻本が作られている。今回、早稲田大学図書館に収蔵されたのは、この圓道重刊本である。

圓道重刊本は、日本国内の他箇所にも所蔵は確認できない。現在、イギリス・大英図書館と中国・首都図書館には同版が所蔵されているものの、首都図書館蔵本は下巻のみの零本であり、いずれも影印などはない稀覯本である。圓道重刊本の元となった正統元年刊本も影印は刊行されておらず、このたび早稲田大学図書館に収蔵され、古典籍総合データベースで公開されている書影は、上巻に206話、下巻に202話を収める『釈氏源流』の内容を公に伝える唯一の情報として大きな価値のあるものである。

早稲田大学図書館が所蔵する『釈氏源流』は、冒頭を缺くが、上巻巻首には初唐の文人である王勃の「釈迦如来成道記念化事蹟記」の末尾部分の一枚を存し〔写真1〕、続いて仏伝故事が第一話「買花供仏」から始まる〔写真2〕。故事のタイトルを四字で掲げ、半葉ごとに下段に文、上段に挿絵を掲載するスタイルである。上巻三冊、下巻三冊の全六冊で〔写真3〕、各巻末には「釈氏源流」との尾題があり、上巻末には正統元年刊本の刊語〔写真4〕と、本文中の難字の音を示した「釈音」に続いて、「板在阜成関外衍法寺西方丈比丘本讚印行」との刊記がある〔写真5〕。また下巻末には「伏願施財衆善人等見存獲福幽顯蒙恩世出世間福德智恵在／佛光中吉祥如意（空三格）大興隆寺募縁比丘圓道發心重刊（伏して願はくは財を衆善の人等に施し、見存に獲福し、幽顯に恩を蒙り、世出世間に福德智恵あり、仏光中に在りて吉祥如意ならんことを。大興隆寺募縁比丘圓道發心重刊）」との刊記がみえる〔写真6〕。これらの刊記によれば、当該の版本は、北京の大興隆寺の比丘圓道が寄付を募り重刊した板木を用いて、衍法寺の比丘本讚が印刷刊行したものである。当該版本上巻の合計6話には施主者の名前が刻されているが、そのうち第49話、第50話には「慈仁寺圓貴刊」、第51話には「慈仁寺僧徳通」とあり、慈仁



[写真2] 第一冊本文首



[写真1] 第一冊首



[写真3] 全六冊表紙



[写真5] 刊記(上卷末)



[写真4] 上卷尾題、刊語



[写真6] 刊記(下卷末)

寺の僧が施主であることが示されている。大興隆寺、衍法寺および慈仁寺はともに、現在の北京市西城区に存した寺院である。また衍法寺の本讃は、嘉靖三十八年（1559）から万暦十四年（1586）頃にかけて『釈氏源流』以外の書籍の出版にも関わっていたことが知られる人物である（『中国古籍総目』参照）。したがって当該版本は、明の都が南京から北京に移された後の十六世紀後半に、北京の近接する寺院間のネットワークの中で刊行されたものであることがわかる。なお、『釈氏源流』は、成化二十二年（1486）に明の憲宗によって毎張表に絵、裏に文を載せる形に形式を改め内府刊本としても刊行されている。さらに『釈氏源流』は後に触れるように、清代の改編本や、朝鮮本、和刻本もあり、仏書の出版の多様な展開を示す具体的事例となっている。当該の圓道重刊本は、そうした中で、明代の北京の寺院における出版の実際の様相を伝え、また当時の社会や国家の動きと仏教の関係をも浮かび上がらせる、きわめて有用な資料といえる。

さて、圓道重刊本『釈氏源流』は、先に述べたように、この早稲田大学図書館蔵本以外には、イギリス・大英図書館と中国・首都図書館にしか所蔵が確認できず、刊行後どれほど普及したものかは不明である。しかし、この版本が後の『釈氏源流』の流布につながる一起点となったことを窺わせる情報がある。一つは、1648年に朝鮮禪雲寺で開板された朝鮮版『釈氏源流』で、この版本の巻上首には「大興隆寺 発心刊施流通」との刊記があり、大興隆寺圓道の重刊本を元に作成されたものと考えられるのである。しかも、禪雲寺本の序文には、松雲師（松雲惟政）なる人物が日本から朝鮮に持ち帰った伝本を元に刊行したものとの経緯が記されており、大興隆寺圓道の重刊本が十七世紀以前に日本に伝来していた可能性が示唆されている。なお、禪雲寺本には、正統元年刊本（および圓道重刊本）で追加された故事も含まれていて、そのことからこれが大興隆寺圓道の重刊本に基づくものであると判断できる。ただし禪雲寺本には圓道重刊本にはみられない独自記事も追加されており、各版本間の関係は複雑である。ちなみに、禪雲寺本の刊行と時を同じくして正保五年（1648）には和刻本『釈氏源流』（挿絵なし、仏伝のみの208話）も刊行されているが、和刻本が収載する故事は、禪雲寺本と共通しており、両本の重なりが注目される。

もう一つ圓道重刊本からのつながりを示すものは、清の永瑤親王が仏伝部分のみを改編し、和碩豫親王裕豊が嘉慶十三年（1808）に刊行した『釈迦如来応化事蹟』である。その巻首に置かれた永瑤の「重繪釈迦如来応化事迹縁起」には、「衍法蘭若」の「明刻本釈氏源流」を入手した永瑤が、これを広く流通させるために改編本を作成した旨が記されている。この「衍法蘭若」（衍法寺）の「明刻本」というものも、おそらく圓道重刊本を指すと考えられ、圓道重刊本が後世の『釈氏源流』（『釈迦如来応化事蹟』）の普及に貢献

を果たしたものであったことが窺えるのである。

またこれは圓道重刊本に限ったことではないが、『釈氏源流』が有する資料的意義を考える際、いま述べてきた各種版本の展開ということに加えて注目すべきは挿絵である。例えば、明清の寺院壁画には『釈氏源流』と密接に関わる事例が複数ある（四川省覺苑寺など）。『釈氏源流』各伝本における挿絵の特徴および作画環境やその背景の考察は、近年高まりつつある絵入り版本への関心とも相俟って、中国美術研究に資する恰好の事例となろう。さらに、日本美術資料との関係においては、京都嵯峨清凉寺の「釈迦堂縁起絵巻」や京都壬生寺の伝雪舟「釈迦八相図」との関係も指摘されている。

以上、『釈氏源流』は、仏教の伝播がもたらした思想や宗教のみならず、言語や文学、絵画芸術、出版文化などさまざまな領域にわたる事象につながり、それらに対する複合的総合的な研究の進展を促すものにほかならない。圓道重刊本の「出現」は、その大きな機縁を生み出すものとなる。

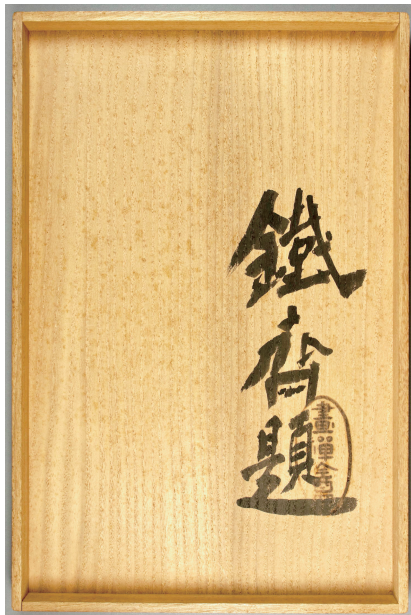
## 二、富岡鉄斎の蔵書

今回早稲田大学図書館に収められた『釈氏源流』は、富岡鉄斎旧蔵本であり、帙や箱には鉄斎による題署や署名が残され[写真7][写真8][写真9]、また複数の蔵書印も捺されている。鉄斎愛蔵の一本であったことが感じ取れるが、鉄斎にとっては蒐書自体が最終目的であったわけではないことが伝えられている。一大蔵書をなした鉄斎であるが、鉄斎はそれら書物を活かし、書物を愛し、書物と暮らした真の読書人であり、文人なのであった。鉄斎の孫の富岡益太郎は、その鉄斎の姿勢を次のように記している。

鉄斎は終生自分は本来儒者であって、画を本業とするものではない。自分の画をみる人はまず画賛の詩や文を読んで、その意味を理解してから画を見てほしいと主張していた。……鉄斎は晩年までほとんど一日も読書を怠らず、驚くばかり詳しく蔵書を読破し、その中に興味を引く記事があればそれを画題にして画をかき、亦ある画題の画を依頼されれば、それに関する参考書を徹底的に調べた。……「必ず典拠あり」ということが鉄斎の作品についての自負の言である。一般の画家が下絵を作るところを、鉄斎は書物を読む、読書こそは鉄斎の画をかく原動力であり、書物を離れた鉄斎芸術は絶対にあり得ぬものである（「鉄斎の画業」『没後五十年記念 富岡鉄斎展図録』朝日新聞東京本社企画部、1974年）。

また、鉄斎がいかに「書物の人」であったかについては、中国文学研究者の青木正児もこう記している。

鉄斎翁は有名な蔵書家であつた上に、博覧な読書家であつた。蔭軒君の話では、翁が絵を画く前には必ず書



【写真9】 内箱蓋裏面



【写真8】 内箱蓋表面



【写真7】 帙題

庫に入り、何か本を持ち出して読み耽る。本を置いたと思ふと、やがて塗抹し始めたと思ふ。また翁は非常に筆まめな人で、文献の抜書きを沢山作つて居られた。……想ふに翁の場合は画よりも先きに讀が出来たのだと謂へよう（青木正児「鉄斎 画讀積文解説 画讀積文解説の後に」『青木正児全集』第六卷、春秋社、1969年）。

文中にみえる蔭軒君とは、京都帝国大学を卒業し漢学者となった本田成之のことで、鉄斎に師事して書画を学んだ人物でもある。このように鉄斎の周辺には、京都帝国大学関係者を中心とする学者が集い、鉄斎の墓誌も狩野直喜、長尾雨山、小川琢治、本田成之らの撰になっている。これらの人物との交遊関係が築かれた背景には、鉄斎の息子の富岡謙蔵の関与も大きかったはずである。というのも、謙蔵自身、京都帝国大学文科大学講師を勤めた学者であったからである。鉄斎は謙蔵を通して京都帝国大学の教授陣や、当時京都に滞在していた中国学者羅振玉とも親しく、古典籍に精通した学者らとの交流を通して、充実した蔵書を築いていったことが推察される。

当該『釈氏源流』を、いかにして鉄斎が所蔵することになったのか、詳細はわからない。すでに日本に伝来していたものを入手したのか、あるいは当時しばしば北京から書物を輸入販売していた古書店を介して購入したか、あるいは中国に調査出張にでかけた謙蔵が現地で購入したものかもしれない（高木理久夫氏のご教示による）、複数の可能性が考えられる。なお、謙蔵も鉄斎を凌ぐほどの愛書家であり、現在は富岡家の手を離れ国宝となっている唐鈔本『王勃集』巻第二十九・三十は、謙蔵が「五千八百金」の大金で購入したものであった。謙蔵、鉄斎の死去後、昭和十三年（1938）に鹿田松雲堂が取り仕切り行われた富岡文庫入札、売立てで、この『釈氏源流』は当時和歌山に古書肆酔古堂を構えてい

た堂場武三郎によって三百六十円で落札されている。そして同日、唐鈔本『王勃集』は一万四千二百十八円の最高値で落札された（柴田光彦編『反町茂雄収集 古書販売目録精選集』第七卷、ゆまに書房、2000年）。想像を膨らませるならば、『釈氏源流』は絵入り本であり、その冒頭に王勃の文が収載されていることからこれもこれが謙蔵の目にとまり、父鉄斎のために購入されたものであったのかもしれない。

さて、当該『釈氏源流』には複数の印が認められるが、各冊表紙や第六冊末尾、また帙、箱には、「画禅龕」という朱印や烙印が捺されている【写真3】【写真9】。これは明代後期の董其昌の号（画禅室）に由来するものである。董其昌は北宗画と南宗画の二つの類型をうち立てた人物で、「万里の路を行かず、万卷の書を読まずして、画祖とならんと欲すも、其れ得べけんや」（『画禅室随筆』巻二）との言葉を残しており、鉄斎はその言を实践したとも伝わる（前掲「鉄斎の画業」）。このこともまた、鉄斎の書物に対する真摯な態度を反映するエピソードである。そのような「書物の人」鉄斎の元にあった蔵書を、早稲田大学図書館が収蔵できる運びとなったことを心から喜びたい。

**附記**；増上寺蔵本については2021年5月13日に実見調査、撮影の便宜をいただいた。

**参考文献**：

- Tsai Suey-Ling (蔡穗玲), *The Life of the Buddha: Woodblock Illustrated Books in China and Korea*, Harrassowitz Verlag - Wiesbaden, 2012.
- 小峯和明「日本と東アジアの〈仏伝文学〉」（小峯和明編『東アジアの仏伝文学』勉誠出版、2017年）。
- 畑麗「釈迦堂縁起絵巻の研究—仏伝図としての視点を中心に—」（『鹿島美術研究年報』25別冊、2008年11月）。
- 土谷真紀『初期狩野派絵巻の研究』第三章「釈迦堂縁起絵巻——渡来図像と異国風俗と本朝風俗と」（青簡舎、2019年）。